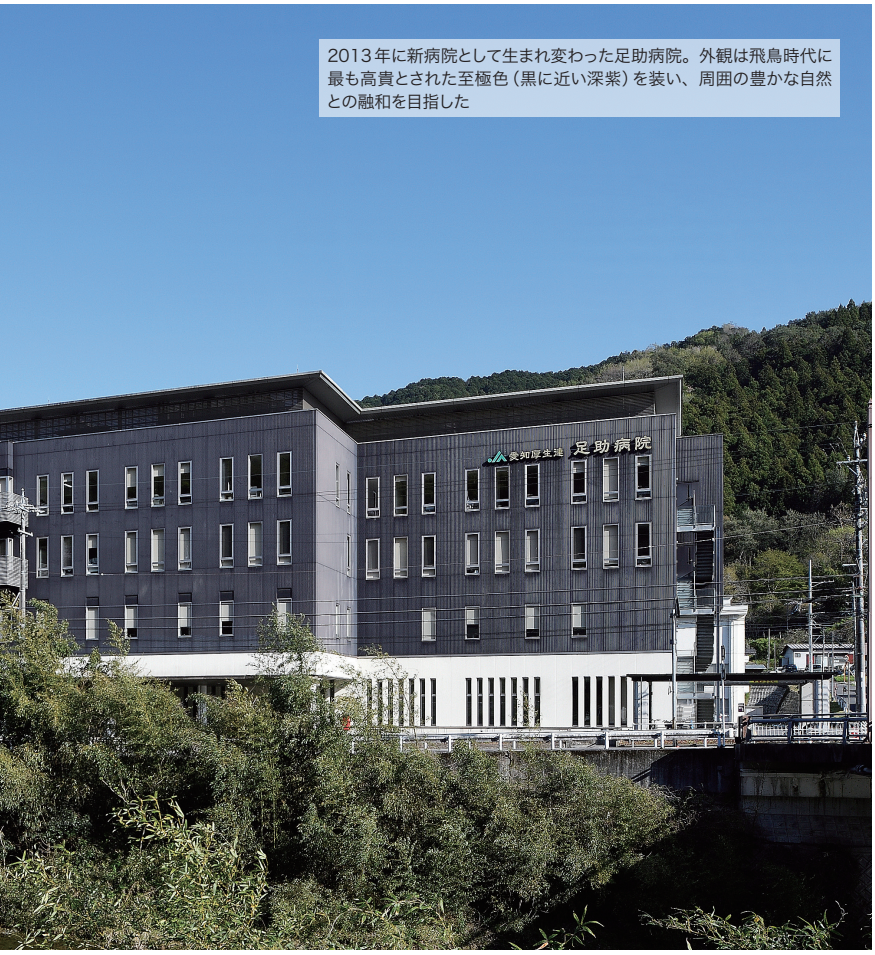
FRONTIER REPORT

地域医療最前線 Vol.11

JA愛知厚生連 足助病院（愛知県豊田市）

〝共に想い寄り添う医療〟をブランディング 人々を惹き付けて中山間部の医療を守り続ける

75年以上にわたって豊田市北東部の中山間地域を支えてきたJA愛知厚生連足助病院。高齢化・過疎化が進行するなかでも、スタッフの確保や教育に注力し、医療・介護・福祉・保健サービスを一体的に提供し続けている。それを可能にしている要因の一つが、病院理念として掲げる「想う医療」のブランディング戦略。同医療をより多くの人々の心に刻み込むことで、同院や地域の持続可能性を高めていく考えだ。



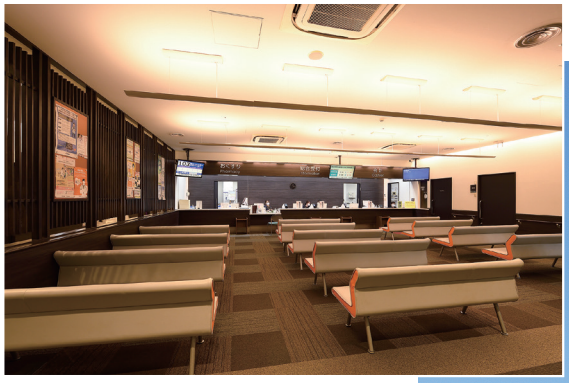
2013年に新病院として生まれ変わった足助病院。外観は飛鳥時代に最も高貴とされた至極色（黒に近い深紫）を装い、周囲の豊かな自然との融和を目指した

少子高齢化が進むへき地でどう機能を維持するかが命題

愛知県豊田市とみよし市の2市からなる人口約48万人の西三河北部医療圏は、3次救急医療機関の2施設を含め20病院、診療所数も280を数えるなど医療資源は比較的潤沢な地域である。しかし、同医療圏の6割弱の面積を占める中山間地域は人口1万5000人にとどまり、高齢化率も40％超に上る。人口減少と高齢化が著しい同地域の医療を担うのが、1950年に開設されたへき地医療拠点病院の足助病院である。2013年には新病院に生まれ変わり、現在は地域ニーズに合わせて一般病棟74床、地域包括ケア病棟74床、介護医療院42床と病床機能を整備。訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターを併設しているのに加え、健康管理センターなどの保健機能も備え、健康・疾病予防から急性期・包括期医療、介護・福祉の各種サービスをワンストップで提供できる体制を整えている。

「2040年に当地域の人口は1万2000人まで減少することが見込まれていますが、高齢者人口はあまり変わりません。ですから、当院の機能をどこまで維持していけるかがわれわれの命題であり、多様なサービスを提供し続けていくために、さまざまな課題や目標

豊田市北部には広大な中山間地域が広がる。その入り口に位置する足助病院（手前）は、同地域の人々の健康や生命を守る最前線に立つ



外来の待合室。1日の通院患者数は250～300人を数える

1階には訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターを併設し、訪問診療・訪問看護・リハビリテーションにも注力。訪問関連車両は看護関連8台、診療関連2台、介護関連9台を確保している

を設定し、工夫を凝らしたり、試行錯誤を重ねたりして乗り越えることに努めています」

こう話すのは、2004年に同院に入職し、2019年に院長職に就いた小林真哉氏だ。もともと消化器内科医として医局人事で同院に派遣されてきたものの、山間の風光明媚なロケーションや住民の気さくな人柄に魅了されたのに加え、2025年に「第13回日本医師会赤ひげ大賞」を受賞したへき地医療の第一人者である前院長（現・名誉院長）の早川富博氏の薫陶を受け、「地域と共に生きる」ことを決意したという。

早川氏は1996年に赴任した直後から訪問診療に従事。過疎地の在宅療養者を見守るため、地域の診療所や社会福祉協議会などとの協働で、画像や生体情報などを双方向で確認できる情報システムを構築。また、地域住民やサービス事業者、行政、各種団体などが連携して活動する「三河中山間地域で安心して暮らし続けるための健康ネットワーク研究会」や、健常者向けの医療や健康に関する勉強会「足助村塾」を発足させ、病気にならないための啓発活動にも努めてきた。

これらの取り組みを一言で言えば、〝開かれた病院〟づくりである。小林氏はこの基本姿勢を継承しつつ、病院長に就任するや否や、〝想う医療〟を病院理念として掲げ、足助病院ブランディングプロジェクトを開始した。医療とは医療者から患者へと一方向的に提供されるのではなく、医療者と患者が共に想い、共に創ることで完結する――。それが小林氏の考える〝想う医療〟だ。

「この地域では、地域医療を守ることと地域社会を守ることは同義です。つまり、住民の方たちにも医療への参画意識を持ってもらい、地域医療や地域社会を盛り立てていただきたい。ただ、それを実践していくには、患者さんや地域住民との信頼関係が不可欠であり、そのためには当院の使命や取り組みなどを周知し続けていく必要があります。また、そうした取り組みは、スタッフの確保や定着を図っていく上でより重要です。『もっと足助病院を世に知らしめたい』という想いで、ブランディングプロジェクトを進めています」と、小林氏は説明する。

「終の住処」「教育」「防災」を軸に多職種・異業種と協同

同院では中山間地域の特性を鑑み、運営方針として「終の住処を支える」「教育の場」「防災の拠点」の3つを軸に、さまざまな活動を展開してきた。まず終の住処を支えていくため、前述のとおり医療・リハビリ・介護・福祉サービスを包括的に提供できる体制を築

2024年12月にAIを搭載した放射線一般撮影の読影システムを導入。撮影した胸部単純X線画像をAIで自動解析し、病変が疑われる領域を検出・マーキングし、医師が再確認することで、見落し防止を支援する

パティオ（中庭）に面して設けられた“ホール”。患者や家族の憩いの場であるほか、地域の住民を集めてイベントや勉強会もここで開催される

足助病院ブランディングプロジェクトを牽引する病院長の小林真哉氏。人生観は“降り注ぐ想いで人々の心を波立てたい”

くとともに、常勤医や看護師を数多く動員して訪問診療や訪問看護など在宅医療を充実させた。また、へき地巡回診療による健康管理に加え、フレイルなどを防ぐ狙いから予防的なリハビリテーションにも力を注いでいる。

教育については、スタッフ教育はもちろん、地域住民への啓発活動や小・中・高校での出前事業など多彩な活動を実践。特に医学教育では愛知県下でへき地医療や総合診療を学ぶ拠点的な施設として位置付けられ、初期研修医や、総合診療医を目指す専攻医を数多く受け入れているほか、医学部をはじめ医療に関わる学生の実習先としての利用も増えているようだ。

「あまり色の付いていない時期に地域の方々と交流したり、農作業を手伝ったりするなど、この地域ならではの研修や実習を体験するなかで、いろいろな患者さんと向き合える能力、EQ（Emotional Intelligence Quotient／心の知能指数）の向上を目指しています」（小林氏）

さらに、中山間部は土砂崩れなどの災害が多発する土地柄であることから、同院を防災の拠点と見立て、講演会や、地域のベンチャー企業と連携してドローンを使った防災訓練なども行っている。

こうしたメインとなる取り組みをベースに、足助病院ブランディングプロジェクトの下、多職種・異業種とさまざまな協同・協業、地域への働き掛けを実践しているのも、同院の特筆すべき点といえる。例えば、▽農林水産省とのタイアップでパッククッキング（災害食）を実習してYouTube配信する、▽日本栄養士会災害支援チームとの協同で被災地支援を行う、▽地元の寺院との連携による看取り後の看仏連携（グリーフケアの一環）の啓発、▽熱中症が危惧される時期に地域ボランティアとの農地の草刈り支援、▽疾病予防を目的とした口コモ教室の開催――など枚挙に暇がない。

「ブランディングプロジェクトでは〝地上展開〟と称していますが、行政や企業、各団体との顔の見える協同・協業により、地域の活性化を図るとともに、コミュニティホスピタルとして健康寿命の延伸などにも貢献することで、患者さん以外の方々にも当院のことを知ってもらえるよう努力しています」と、小林氏は話す。

TV出演などの〝空中展開〟で人材確保や人脈づくりを図る

一方、こうした中山間地域への〝地上展開〟に対し、地域や年齢層を限らずに同院をブランディングしていくため、テレビや雑誌など各メディアを活用した〝空中展開〟にも積極的だ。同院のへき地医療への取り組みはNHKの「クローズアップ現代」にも複数回取り上げられ、テレビ、雑誌、新聞

DATA

JA愛知厚生連 足助病院

診療科：内科、小児科、外科、泌尿器科、整形外科、耳鼻咽喉科、皮膚科、眼科、婦人科

病床数：一般病棟74床、地域包括ケア病棟74床

療養床数：介護医療院42床

住所：愛知県豊田市岩神町仲田20番地

かつて年に複数回行われていた健康講話「足助村塾」を源流に、現在ではさまざまな職種が地域で講演活動を行っている

患者の自宅にある畑で農作業を手伝う前病院長の早川富博氏（写真中央）と研修医。地域住民との交流も研修の一環として行われている

窓から山間の自然が楽しめる病室

などメディア掲載は過去3年間で53件に上る。文筆活動が趣味だと言う小林氏は、同院のホームページに職員と共に1日も欠かさずコラムをアップし続けている。映画のロケ地として施設内での撮影に協力し、地域住民を集めて同院で上映会を催したこともある。

「これらの〝空中展開〟は将来の人材確保につなげていくことが狙いです。なので若者向けのファッション誌など各年齢層にアプローチしていくために、さまざまなメディアを介して露出を増やしています。若い人たちに限らずミドル・シニア層、医療や行政の関係者など多くの人々の心のインデックスに『足助病院』が引っかかって残り、当院を見学・視察したり、一時的でも研修を受けたり、勤務してもらったりする端緒になればと考えています」

このようにブランディングの意義を語る小林氏は、もともと気候や防災に関心があったことから病院長就任後、合格率4・5％という難関で知られる国家資格の気象予報士や、民間資格の防災士を取得。さらにサックス演奏を開始し、同院主催のイベントなどで演奏も披露している。当初は自身が広告塔になって同プロジェクトを牽引してきたわけだ。その後、スタッフの中にも防災士の資格を取得する動きが相次ぎ（現在は16人）、また、イベントや動画、パンフレットなども自前で企画・制作するようになり、ブランディング活動は個から組織全体へと広がった。地域に同院をアピールしていく取り組みはインナーブランディングにもなり、スタッフのモチベーションや働きがいの向上にも寄与している。

人材の育成・確保の面では各種研修の受け入れの成果と相まって、プロジェクト開始前より常勤医の年齢が10歳ほど若返り、2026年の新規の看護師採用数も例年の2倍ほど増えている。

「若いスタッフが多いと活気づきます。2040年にどういう形で足助病院を維持していけるかは分かりませんが、豊田市も運営母体であるJA愛知厚生連も運営には非常に協力的です。これからも独創的で普遍的なテーマを継続的に発信し、中山間地域の医療をより良くしていきたいと思います」と小林氏。地域のニーズや動向を見据えながらチャレンジする姿勢は、今後も堅持し続けていく。